

〈研究論文〉

「予科練くずれ」の教育史的考察

——秋田県立横手中学校における同盟休校と刺殺事件（1945～46年）を中心にして——

白 岩 伸 也

「予科練くずれ」の教育史的考察

——秋田県立横手中学校における同盟休校と刺殺事件（1945～46年）を中心に——

白 岩 伸 也

はじめに

海軍飛行予科練習生（以下、原則として予科練と略称する）は敗戦までに約24万人が入隊し、約1万9千人が戦死した。予科練の採用数は総力戦体制下において急激に増加するが、その大部分は敗戦まで出征しなかったため、敗戦後に文部省が所管する教育機関へ復学あるいは転入学したものが少なくなかった。すでに筆者は、戦後初期における旧軍関係教育機関出身者に対する施策の形成過程、そしてその施策をめぐる中等・高等教育機関の対応状況を解明している^①。その成果を踏まえながら元予科練の動向を追ってみると、「帝国日本」・「軍国日本」から「民主日本」・「平和日本」への転換が図られるなかで、元予科練が教育機関の内外で事件を起こしたと報じられ、彼らは「予科練くずれ」などと呼ばれた様子がうかがえる^②。

それでは戦後初期という「戦前」と「戦後」が未分化な時期において、元予科練はどのような行動をとり、それがどのようにみられたのだろうか。1946(昭和21)年3月27日、秋田県立横手中学校（以下、横手中と略称する）で行われた卒業式のあとに、卒業生が在校生によって刺殺される事件（以下、刺殺事件と略称する）が起きたと報じられた。各紙は、上級生として復学した元予科練や元特別幹部候補生が下級生に対して行っていたリンチに注目し、それを刺殺事件の原因とした。刺殺事件に関する報道のなかには、1945(昭和20)年10月27日に横手中で勃発した同盟休校に元予科練らが関与したことを指摘する記事もあった。

横手中の卒業生は当時をつぎのように振り返る。「忠君愛国の思想をたたき込まれ、聖戦に身を捧げる気で訓練に励んでいたものを、軍隊は侵略戦争の道具であったと、手のひら返す世間の風潮に、彼等（元予科練や元特別幹部候補生：引用者注）の心がすさむのは当然であった。（中略）暴力沙汰は日常茶飯事で、チェーンヤドスを持っている者すらいた程である」、「特幹・予科練などから上級生たちが続々と美入野（横手中：引用者注）に戻り、目標が定まらないままに校内では暴力が幅をきかせ、二十一年三月には大きな事件（刺殺事件：引用者注）まで発生した」^③。

広範囲にわたって「予科練くずれ」やその報道がみられたため、横手中の同盟休校や刺殺事件はその一事例にすぎないかもしれない。だが同盟休校や刺殺事件を通じて元予科練に焦点が当てられ、そのなかで彼らの問題性がクローズアップされたとすれば、横手中の事例は「予科練くずれ」が立ち現れるひとつの契機であった可能性がある。そこで本稿は、これまで等閑に付されてきた横手中の同盟休校と刺殺事件に焦点を当て、その経緯と背景について当時の教育史的な文脈を踏まえながら解明する。具体的には、こうした事件が中等学校という場で起きた点に注目し、「戦前」から「戦後」へ転換を図る中等学校の動向を踏まえながら、「予科練くずれ」が立ち現れる過程について考察したい。

「予科練くずれ」に関する研究として、福間良明と吉田裕の論考が注目される。福間は敗戦直後に「特攻くずれ」や「予科練くずれ」が「マスコミで格好の記事材料にされた」点を指摘し、その後に変容していく「特攻」表象とそこに照

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教育基礎学専攻

射される戦後日本のナショナリティを浮き彫りにした。吉田も「特攻くずれ」という言葉について触れながら、「戦記もの」や旧軍人団体に焦点を当て、「兵士たちの戦後史」を明らかにした。本稿はこうした「語り」の位相にも注目するが、重視したいのは「予科練くずれ」を具体的な事例に即して教育史的に考察することである。福間も吉田も敗戦直後については十分に取上げておらず、特に元予科練をめぐる学校や教育の状況については掘り下げていない⁴⁾。

元予科練はそのような学校や教育の状況、とりわけ同盟休校に関係していたとみられるため、それに関する研究も確認する必要がある。中等教育機関の学校紛擾を主題にした研究として、明治期を対象にした寺崎昌男と佐藤秀夫の論考、さらにそれらが検討しなかった1920～30年代を射程に入れた小野雅章の論考があげられる⁵⁾。ただし佐藤が「この際（1945～47年：引用者注）の紛擾の実態は今なお十分に究明されてはいない」といった状況は現在も変化していない⁶⁾。したがって本稿では戦前の動向を踏まえながら、敗戦後の同盟休校について検討したい。

戦後の学生運動に関する研究にも目を向けると、山中明は敗戦直後の「学園民主化」の動きを「戦後学生運動」の成立過程に位置づけ、その後の展開を概観している⁷⁾。だが敗戦直後の同盟休校については不分明な点があり、特に中等学校については検討していない。この点については、1920年代後半から50年代前半までの学生運動に対する文部省の治安機能を解明した、荻野富士夫の研究に注目したい。荻野は「（敗戦直後の：引用者注）文部省の紛擾への対応は、かつてのような強権的なものではなく、」[学生生徒側の要求を受け入れる方向で「解決」を図っている]が、「教育をめぐる「秩序」が混乱する事態を苦々しくみる見方もあった」という⁸⁾。こうした文部省の対応については荻野の論を参考にする。ただし荻野は敗戦直後の各校の事例を具体的に検討したわけではないため、以下ではその点に焦点化して論じる。

このような研究状況を踏まえて、本稿ではつぎの手順でアプローチする。まず横手中で同盟

休校が発生した経緯や背景を概観し、その全国的展開とつき合わせながら、同盟休校に対する元予科練のかかわり方を探る。つぎに刺殺事件の経緯や背景について、全国紙や地方紙の記事から検討しながら、それをめぐる元予科練の位置づけについて考察する。そして「予科練くずれ」とその教育史的意味について試論を述べる。主な資料として新聞記事を扱うが、敗戦直後は新聞社が少なく、紙面も限られていたため、卒業生の回顧録や学校沿革史なども用いる。

1. 同盟休校と復員生徒

(1) 秋田県立横手中学校

はじめに横手中で同盟休校が発生するまでの経緯について、予科練の動向を中心に確認しておきたい。逸見勝亮の研究から戦前の中等学校と予科練の関係について概観すると、1943（昭和18）年から甲種飛行予科練習生の採用枠が大幅に拡大し、そのなかで中等学校に対して志願者の割当数が課され、それを充足するための方策が過激化していった⁹⁾。1944（昭和19）年の新聞記事によると、秋田県における志願兵の割当数に対する「適任率」が、横須賀鎮守府管下の都道府県のなかで「第一位」であり、なかでも甲種予科練は「無条件断然第一位」だったとされている¹⁰⁾。横手中の教務主任の日記をみても、陸軍士官学校や海軍兵学校の入校者もうかがえるが、やはりそのなかで予科練の採用者の割合は高いことが確認される¹¹⁾。そこではさまざまな募集方策が展開したことが予想されるが、結果的にその大部分は出征しないまま敗戦を迎えたのである。

1945（昭和20）年9月、旧軍関係教育機関出身者を中等学校へ「復帰入学」あるいは「編入学」させるために、文部省は地方長官に「陸海軍諸学校在学者ノ編入学ニ関スル件」（1945年9月5日発専120号）を通牒した。そしてそのなかで彼らを「出来得ル限り入学」させるために「学級増加」や「二部教授」を勧告している¹²⁾。それに対応するように横手中は10月に4年4組を「復員組」として編成した。その人数は69名であり、1945年度に卒業した4年生が167名だ

ったことを踏まえると、学級規模は他よりも大きかったとみられる⁽¹³⁾。「復員組」出身者の回顧録によると、「配置された机の数はそれ（生徒数：引用者注）に足らなかった」、さらに教科書を持参するものも「ごく少数」だったとされている。「復員組」出身者のなかには「在校生にとっても復員組の存在は決して歓迎すべきものではなかった」ため、自分たちは「はぐれ鳥、だった」と振り返るものもある⁽¹⁴⁾。

そうした状況のなかで横手中において同盟休校が発生したが、それを報じたのは『秋田魁新報』であった。『秋田魁新報』はいわゆる県紙として知られるが、その経緯として、1942(昭和17)年5月までに同紙以外の地方紙が廃刊され、1945年4月には「持分合同」により全国紙の発行が同紙に委託されるなかで、1県1紙体制を確立していた⁽¹⁵⁾。

1945年10月30日付の記事によると、10月23日に「県立横手中学校四年生一同」が「盟休態度」を示したが、校長の「誠意」によってそれは「落着」したとされる。だが生徒らが「学校当局は曖昧な弁解で欺瞞を事としてゐる」と判断し、27日に同盟休校に入り、「明朗学園建設」を掲げて学校側に決議文を提出した。その内容としては、「教師の食糧買出命令」、「燃料収穫食糧の私物利用」、「教師の品位低下」、「復員生徒に対する冷淡」、「個人主義的標本四教師の急速な退職」の5点があげられていた⁽¹⁶⁾。11月1日付の記事によると、10月30日には「父兄会」による「調停努力」もあって、この問題が「円満解決」し、決議文の要求も受諾されて11月5日から登校することになったとされる⁽¹⁷⁾。

以上のように『秋田魁新報』は同盟休校について報じたが、元予科練がそれに関与したことを明示しているわけではない。ただし生徒の決議文から復員生徒の存在がうかがえる。先述したように復員生徒の受入態勢は十分に整っていなかったため、そうした状況に対する不満が一要因となって彼らを同盟休校へ向かわせたのではないだろうか。ただし横手中の事例のみではこれ以上のことはわからないため、他の中等学校で発生した同盟休校について概観し、そのな

かから元予科練の動向をたどってみよう。

(2) 全国的動向

全国的な動向を確認すると、文部省の調査によれば⁽¹⁸⁾、1945年11月5日現在で「学校紛擾」が発生した件数は大学などで4件、中等学校で45件とされている。「紛擾」の理由は、大学などでは軍国主義の反対や自治学園の要求など、中等学校では教員の排斥や農産物の配給問題などであった。この調査について荻野が「実際にはもっと多かったはずである」と推察するように⁽¹⁹⁾、たとえば後述する新潟県立佐渡中学校の同盟休校は扱われておらず、その件数は文部省の想定を超過していたと思われる。また秋田県の中等学校では「主として農産物の配給の問題」を理由として「紛擾」が9件発生したとされており、その数は他県と比較して最も多い。それ以降のものも含めると11月中旬までに12校で発生しており⁽²⁰⁾、秋田県はその対応に奔走したと推測される。

こうした展開をみせるなかで、元予科練は同盟休校にどうかかわったのか、あるいはかかわらなかったのか。秋田県の動向をみると、能代工業学校において10月27日に同盟休校が発生しており、そのなかで生徒らが校長に出した文書のなかで、「陸海軍諸学校生徒復員に対する冷淡なる態度」を指摘している⁽²¹⁾。同校の沿革史には「予科練帰りの生徒」の関与をうかがわせる記述もあるため⁽²²⁾、横手中と同様に学校側の対応に元予科練が不満を表明したと考えられる。

他県に目を向けると、前述の佐渡中学校の同盟休校では生徒らが10月26日に「希望書」を出しており、そのなかで要求事項の一つとして、「復員学徒ノ待遇ニ誠意ナシ」、「入隊時ハ無理ニ進メタニモ拘ラズ一度終戦ニ至リ復員スルヤ其ノ苦勞ヲ慰勞セズ其ノ処置ニ誠意ナシ」と訴えている。それ以外にも「未ダ軍国主義的教育」を行う教員の辞職を求めた。同校の「不穩事件記録簿」では、学校側は「復員学徒には決して差別待遇をしていない」と応えたとされている。『新潟日報』(1945年11月1日、第2面)によると、同盟休校時に「上級生」が「下級生」へ「暴力」を加えていたことについて、校長が「軍

国主義と何ら変わりなく、平和を愛好する民主主義の在り方ではない」と批判したとされる。さらに校長は「真の民主主義を育成するため全国に比類ない全校生徒の停学処分を行った」、「生徒の思想をコントロールして行きたい」と述べた⁽²³⁾。ここから「軍国主義」を批判する生徒と、彼らを「軍国主義」的と指弾し「民主主義」の「育成」を図る校長とのせめぎ合いがみられる。

さらに群馬県立前橋中学校（以下、前橋中と略称する）の同盟休校では元予科練がクローズアップされている。これを報じたのは『上毛新聞』だが⁽²⁴⁾、同紙も『秋田魁新報』と同様に1県1紙体制のなかで基盤を確立していた⁽²⁵⁾。1945年10月25日付の記事は同盟休校の「首謀」を「予科練出」と断定し、つぎのように報じている。それによると「予科練生の転入学、復校」が「大きな波紋」を起し、「四年に復帰した四十数名の予科練出身者が一団を結成して密々運動を起し」、24日に要求条項を提出したとされる。また同記事は「満州事変以前」に75回行われている前橋中の同盟休校が「余りにも有名であ」り、それを「伝統」あるいは「校風」として捉えている⁽²⁶⁾。

23日付で内政部長が各中等学校長へ発した通牒には、「盟休其他好マシカラザル事件ノ頻発顕著ニシテ未ダ本県下ニハ之ヲ見ザル」とあるため⁽²⁷⁾、前橋中のそれは群馬県で戦後初のものといえる。またそれはラジオ放送によって全国へ伝えられた⁽²⁸⁾。25日にも「代表の予科練生」がさきの要求への回答を校長に求めた⁽²⁹⁾。校長は「若き身を至誠尽忠の一途に燃やして予科練を志願した者」を「学校としては親心として彼らを受け入れたにも拘らず、逆の意に解釈されたのは意外」そして「残念」と応えている⁽³⁰⁾。

そうしたなかで復員生徒を対象とする補習科⁽³¹⁾の生徒が上毛新聞社を訪問しつぎのように訴えた。「今度の休校は或一部の腕力により引摺られたもので遺憾に思っている、昼食を食つたら皆んなついて来といふので、ついて行つたといつて居り、四年生全部の意向ではない、言論自由の今日、腕力は排撃すべきだ、それから予科練全部が首謀者のやうに見られてゐるが、

予科練の全部が参加してゐるのではない、この点誤解を解きたい」⁽³²⁾。後年に行われた座談会でも、当時の教員が「ストライキは必ずしも彼等（元予科練：引用者注）がやったわけではないでしょう」と回顧している⁽³³⁾。元予科練ではないが1947年の卒業生の日記には、「同盟休校は一種の流行化してしまつたのではないか。盟休の理由もないのに」と書かれている⁽³⁴⁾。やはり生徒側も一枚岩ではなく、なかには同盟休校に懐疑的なものもいたとみられる。

(3) 行政側の対応

同盟休校が頻発する状況に鑑みて、文部省学校教育局長は学校長に「紛擾事件ニ関スル件」（1945年11月1日発学19号）を通牒し、それが「惹起」したら「遅滞ナク」、「原因」、「経過」、「結末」などを報告させるようにした⁽³⁵⁾。そうした報告を踏まえて学校教育局が作成したと思われる、「第八十九回帝国議会予想質疑事項並答弁資料」のなかには、「学校紛擾ニ対スル文部省当局ノ方針」に関する答弁がある⁽³⁶⁾。それによると「学校紛擾」については、「従来専ら戦争遂行ノ線ニ副ツテ居タ学校当局ノ教育方針カラ解放サレ自由ナル学園生活ヲ希望スルガ大体ノ傾向」だが、「多クノ場合特別ノ思想的背景ハナイ」とされる。実際に11月30日の第89回帝国議会において、長岡隆一郎が「民主主義ノ真意ヲ誤解シ、学生ノ本分ヲ逸脱」しているものがあると発言している。それに対して文部大臣の前田多門が、さきの予想答弁を踏まえながら、「自由ヲ放恣ト履違ヘテ」いる件については「非違ヲ論シ改メナケレバナラナイ」と応えた⁽³⁷⁾。

秋田県に目を向けると、『秋田魁新報』によれば、秋田県教学課が同盟休校について「一つの反動的行動であり大して問題視する程の事ではない」と述べたとされる。一方、同紙は同盟休校の原因として「戦時的教育の早急なる自由への切換」と「食糧、物資の公正なる処理」の2点をあげ、「今後の新らしき教育の方向に大きな示唆を投げてゐる」と評価したうえで、「流行物程度」と捉える県の所信を「不可解極まる」と批判した⁽³⁸⁾。11月27日から開始した秋田県通常県会でも、しばしば同盟休校について言及され

ていた。なかでも加賀谷保吉は12月3日に「最モ道義的社会的デアルベキ管ノ教育界カラ相次イデア『ストライキ』ガ流行シ、師弟ノ反目ト云フ教育ノ根本ヲ崩潰スルガ如キ学園ノ悲劇ニ直面シテ」と述べた³⁹⁾。

学校制度が整備された明治期から発生していた同盟休校は⁴⁰⁾、戦時体制下にはみられなくなるものの、以上のように敗戦後の中等学校をめぐる混乱状況に際するなかで、再び全国規模で展開した。元予科練も学校側の「冷淡」な対応などに不満を抱きながらそれに参加し、なかには同盟休校を主導しつつ「非軍事化」や「民主化」を訴えたものもいたと考えられる。もちろんそのなかには同盟休校をめぐる動きと一定の距離を置こうとするものもいた。それに対して行政側は同盟休校を「民主主義」や「自由」を「誤解」した「流行物」と捉える傾向にあり、その「非違」を是正しようとしたとみられる。

2. 刺殺事件とその報道

(1) 敗戦後の新聞復刊状況

このように全国中等学校において同盟休校が発生したが、1946(昭和21)年に入るとそれまでと同様に報道で取り上げられることはなくな

っていく。再び横手中の「復員組」に注目すると、1945年12月に学校から「指名で二、三十人ほどに「卒業はさせるから三学期は登校に及ばない」との達し」が下されていた。1946年3月には卒業試験が実施されたものの、「氏名は書いて答えの欄は全部解答不能と記して提出した」生徒もいた⁴¹⁾。そのため同盟休校が発生してからも復員生徒を遠ざけるような態度は変わらなかったと考えられる。そうしたなかで1946年3月27日に刺殺事件が発生した。以下では表1と表2を参照しながら、敗戦後に全国紙の地方版と地方紙が復刊される状況を概観したうえで、刺殺事件とその報道について検討する。

先述したように総力戦体制下には『秋田魁新報』中心の1県1紙体制が構築されていたが、1945年10月に「持分合同」が解かれると、全国紙の地方版が復刊された。表1と表2にあるように、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売報知』の地方版が刺殺事件を扱っている。ただし記事にした回数も文字数も『秋田魁新報』より少ない。全国紙よりもやや遅れて、地方紙が復刊あるいは創刊されはじめると、11月4日には『秋田民報』が復刊された。同紙は1県1紙体制のなかで廃刊された『仙北新報』が復刊されたものであ

表1 刺殺事件関連新聞記事見出し一覧 (1946年)

番号	日付	見出し	掲載紙	面
1	03/28	上級生を刺し殺す/卒業の日/横中生の惨行	秋田魁新報	2
2	03/29	横中の刺殺事件/敗戦から尾を曳く一悲劇/蛮行 `別れのびんた`	秋田魁新報	2
3	03/29	リンチの仕返し/上級生を刺殺す	朝日新聞	2
4	03/29	横手中生/上級生を殺傷	毎日新聞	2
5	03/30	社説/学園テロと教育行政	秋田魁新報	1
6	03/30	読者の声/未だ居る軍国主義者	秋田魁新報	2
7	03/30	罪は『戦争』に/横手中生の私刑後聞	毎日新聞	2
8	03/30	あはれ十九の春・・・/ `血に染む卒業証書` / 二十七日横手中の悲劇/原因は `別れのビンタ` / 拭へ軍国調の残滓	秋田民報	3
9	03/31	罪は心のゆるみに/相次ぐ学校の不祥事件	読売報知	2
10	03/31	リンチを恨み/卒業生を殺害/横中四年生が	読売報知	2
11	04/01	不適教員を追放/横中父兄会輿論を調査	秋田魁新報	2
12	04/02	学園の蛮行/遠慮なく措置せよ/県、中等学校長へ指令	秋田魁新報	2
13	04/03	学生の墮落/校外の取締/各署へ通牒	秋田魁新報	2
14	04/04	リンチには放校処分/大館中学でも蛮風一掃へ	秋田魁新報	2
15	04/07	リンチは放校処分/大館中学蛮行一掃に断/地区別に設く父兄会	読売報知	2
16	04/09	北鹿抄	北鹿新聞	1

注1) 『秋田民報』と『北鹿新聞』は秋田県立図書館所蔵のマイクロフィルム、『朝日新聞』は湯沢市立湯沢図書館所蔵の原資料、他は国立国会図書館新聞資料室所蔵のマイクロフィルムを閲覧。

注2) 『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売報知』については「秋田版」と称される地方版を参照。

表2 刺殺事件関連新聞記事内容一覧 (1946年)

掲載紙 ^(注1)	概要	原因	証言
1 秋田魁新報 3/28	二十七日午後二時二十分頃横手駅前羽後鉄道会社裏空地へ卒業証書を手に喜び帰途にあつた横手中学校卒業生五、六名を四年生二十数名が誘き出し口論格闘の果四年生□□郡□□村□□□□□□□□良二(一八)は問答無用とばかり隠し持った刃物で卒業生□□郡□□村□□□□氏長男一夫君(一七)の左胸部を一刺し鮮血ほと走るを見るや脱兎の如く逃走。被害者は附近平鹿病院に担ぎ込み応急手当を加へたが出血多量のため間もなく死亡した。	原因につき調査中なるが学校当局は厳禁して見たにも拘らず同校ではリンチが常に行はれて見たものらしく四年一部生徒が意趣晴らしを目論んだもので逃げ遅れた被害者の一人が奇禍を受けたもの。	両名とも日頃素行の悪い生徒ではなかつたと学友は語つてゐる。(略)田尾校長談 予想もしない事件であつて思ひがけない生徒がなかにあつてこんなことゝなり洵に遺憾です、今のところこれ以上は申し上げられません。
3 朝日新聞 3/29	秋田県□□郡□□村横手中学三年生某(一八)は、二十七日午後二時頃卒業証書をもらひ帰郷すべく横手駅前にやつて来た同県□□郡□□村□□□□さん四男一雄君(一九)を待伏せ、同級生二十名とゝもに喧嘩を吹きかけ、小刀で相手の左胸部をつき刺し、相手の昏倒するのを見て狼狽、被害者を附近の病院に担ぎ込んだが出血多量のため絶命。	同校には上級生が下級生に対しリンチを加へる蛮風があり、平素いぢめられてゐた加害者らがこの日を逸してはと復讐を図つたもの。	
4 毎日新聞 3/29	県立横手中学五年生□□一雄(一九)は廿七日午後二時半ごろ横中卒業式の帰途、横手駅附近広場で同校四年生□□□良助(一八)一仮名一と口論、越後谷のため左胸部をナイフで刺され、出血多量のため死亡。	原因はリンチの復讐とみられてゐる。	
8 秋田民報 3/30	卒業証書をふところにしたまゝ今朝までの下級生の兇刃にたふれた「学園血の春の悲話、二十七日午後二時頃横手駅前羽後鉄道会社裏空地で突発した惨事で被害者はこの日横中を卒業したばかりの□□郡□□村□□一夫君(一九)で加害者は一級下の□□村□□□□□□□□良二(一八)。一夫君が横手駅で帰りの列車を待合せてある所へ良二が迎へに来て羽後鉄道の裏空地へ誘ひ出し口論を始めたとみる間に良二がかくしてゐた刃物で一夫君の左胸部を一突きに刺し驚いて仲裁に入った人達の手で一夫君を平鹿病院へ運んだが出血多量で病院へ着いた時はすでに絶命してゐた。	原因については横手署で調査を進めてゐる。(略)真相は不明である。(略)卒業の日卒業生の大半を占める予科練、特幹等の復員者が在校生に対し挙式前棍棒で「別れのピンタ」を行つたことが痛く在校生を刺戟した結果でその外彼等は在校当時から暴行沙汰なども平気で行ってをり学校側でも根本的な対策を講ぜずさわらぬ神にたゝりなしの態度をとつてゐたことも指弾されてゐる。全く気の毒なのは被害者の一夫君で死体は廿八日午後一時から横手病院桜井博士の執刀で解剖に附された。	両名とも日常素行の悪い点は無く友達つきあひも円満であつたと級友が語つてゐる。(略)被害者一夫君の実父□氏は語る。卒業当日こんなことになるとは思はなかつた、十九年の苦心も水の泡です、しかし子供同志の喧嘩が生んだ結果で良二君に恨みはありません、きけば自殺のおそれがあるとの事、将来ある身に過ちのないやうみんな気をつけて下さい。横手中学校教頭談。一夫君は温良で成績もよく恨みをうけるやうな生徒ではないし何故こんなことになつたか判りません、学校側としても何とも申し訳のないことですが何より教育者として至らなかつたこと深謝し反省しなければなりません。
10 読売報知 3/31	秋田県立横手中学校四年生□□□良二(一八)ほか同級生廿数名は廿七日午後二時十分ごろ横手駅構内横庄鉄道車庫裏の広場付近に卒業証書を握つて喜んで帰る同校の卒業生五名を誘ひ出し口論のゝち□□□は短刀で卒業生の一人□□郡□□村□□民雄(一七)君の左胸部を突刺し殺害。	四年生一同は今年の卒業生からよくリンチを受けてきたのを恨み卒業式からの帰途を待つてこの兇行に及んだもの。	

注1) 1番左の列(掲載紙)は表1と対応させるかたちで、上から番号、掲載紙、日付を記した。
 注2) 刺殺事件をはじめて報じた各紙の記事の本文から、刺殺事件の概要、原因、証言に該当する部分を引用した。
 注3) 引用の際、原則として住所と名前を伏せており、字数分だけ□で表した。ただし他紙と比較するためにその一部を記している。明白に誤字と判断される箇所は修正し、適宜句点を付した。

り、県内で戦後最も早く復刊された地方紙であった⁽⁴²⁾。秋田民報社は横手中のある平鹿郡横手町にあったため、秋田魁新報社と同等かそれ以上に横手中の情報を収集しやすかったと思われる。

ただしこの時期の地方紙全体の状況としては、「(1県1紙体制の：引用者注) 前のような華々しさはまだ見られない」様子であった⁽⁴³⁾。その原因として、占領軍が既存紙の活動を抑制し新興紙を育成しようとしたけれども、新興紙は既存紙を超えない枠のなかでしか用紙が割り当てられず、それによって既存紙の既得権益が保護されたことが考えられる⁽⁴⁴⁾。刺殺事件発生前後の地方紙をみると、それに関する記事はほとんどない⁽⁴⁵⁾。『秋田民報』とは異なり、復刊された地方紙の多くは、その発行区域が横手町から離れており、『秋田魁新報』のように日刊ではなかった。そのため刺殺事件を取り上げなかったと推測される。以上のような出版状況を踏まえながら、次項では刺殺事件を報道した順番にしたがって、それぞれの記事内容を分析する。

(2) 各紙の記事内容

刺殺事件をはじめて報じたのは『秋田魁新報』の3月28日付の記事である(表1の番号1の記事。以下表1の番号1であれば1-1といったように表記する)。同記事は第2面の4～6段目に掲載されたが、当時の『秋田魁新報』は2面構成で、第1面は全国ニュースが大部分を占めていたことを考慮すると、刺殺事件のニュース性は決して小さくなかったと推測される。同記事によると18歳の4年生が17歳の卒業生を刺殺したとされている。そしてその原因は「調査中」とされながらも、「リンチ」に対する「意趣晴らし」が指摘されている。ただし「学友」の証言によると加害者も被害者も「日頃素行の悪い生徒ではなかった」とされており、校長も「予想もしない事件であつて思ひがけない生徒がなかに」いたと述べている。

『秋田魁新報』の翌日に『朝日新聞』と『毎日新聞』が事件の記事を掲載した。表2をみると、『朝日新聞』は『秋田魁新報』と比べると加害者の学年や被害者の年齢が異なるが、事件の原因

を「リンチ」とした点は同様だとわかる(1-3)。『毎日新聞』も『秋田魁新報』と名前や年齢が異なるが、その原因を「リンチ」とした点は同じである(1-4)。『朝日新聞』も『毎日新聞』も『秋田魁新報』のように原因の特定を留保していないため、刺殺事件と「リンチ」に直接的な因果関係があるような印象をより強く与えているとみられる。

『秋田民報』は『秋田魁新報』以外で唯一の地方紙として事件を取り上げた(1-8)。同紙は1946年3月30日付で刺殺事件について報じたが、5日おき発行の同紙にとって最も早い時期に報道したといえる。表2から確認されるように、刺殺事件は『秋田魁新報』などによってすでに報道されていたにもかかわらず、『秋田民報』は詳細な情報を掲載している。そのためそれまで報じられなかった事実を伝えようとしている姿勢がうかがえる。

『秋田魁新報』と異なる点としてまず目につくのは、被害者の年齢を19歳、加害者を18歳としたことである。『秋田民報』が被害者の父親の聴き取りから「十九年の苦心も水の泡です」という回答を得たことなどから、被害者の年齢は正確だと考えられる。そのため被害者を17歳とした『秋田魁新報』の記事に不確かな記述があると思われる。また事件の原因については「調査を進めてゐる」、「真相は不明である」と留保しながらも、復員生徒が在校生に「別れのビンタ」を行ったことを取り上げている。それと同時に注目されるのはこの記述の直後に「全く気の毒なのは被害者の一夫君」と述べた点である。教頭も「一夫君は温良で成績もよく恨みをうけるやうな生徒ではない」といつている。

元予科練として横手中に復学した加藤富夫はつぎのように振り返る。「卒業式の日、横手駅脇の残雪を真赤に染めた刺殺事件が起きたのである。復員組の中にその事件に関係した者は(直接には)なかった」⁽⁴⁶⁾。以上から刺殺事件の被害者とリンチの行為者は別人物であり、必ずしも被害者が元予科練ではなかったと推測される。したがって刺殺事件とリンチに直接的な因果関係はなかったと考えられるのではないだろうか。

『読売報知』はこれらよりも遅れて報じたが、事件の概要や原因は『秋田魁新報』とほぼ同じである(1-10)。ただし『読売報知』は「角館中学から土崎第二国民学校と相つぐ学校火災事件や横手中学の生徒刺殺事件など最近の県教育界は憂ふべき傾向を示してゐるが、これら一連の不祥事件の原因は敗戦による思想の混乱、生活の不安などから来た教育家の精神的弛緩や生徒の自暴自棄の傾向などにあると見られる」と述べており(1-9)、他の事件と関連づけて捉える点はそれまでの報道と若干異なる。

以上のような記事内容のズレや重なりについては不明な点もあるが、遅れて報じた各紙が『秋田魁新報』の記事を確認したうえで別様の記事を書いたとすれば、そのズレは『秋田魁新報』に不確かな記述があることをうかがわせる。リンチは刺殺事件の契機をつくったかもしれないが、必ずしも直接的な因果関係が結ばれるものではなく、少なくとも事件発生当初はそれを断定することは困難であった。だが次節で示すように、日を追うごとに元予科練とリンチの関係に対する注目度が高まっていくのである。

3. リンチへの対応と上学年生支配

以上のように刺殺事件をはじめ取り上げた各紙の記事をみてみると、内容や表現のズレを垣間みることができる。それでは刺殺事件はその後においてどのように報道されたのか。

『秋田魁新報』の3月29日付の記事は刺殺事件そのものというより、それによって「白日下に曝」された「校内の墮落弛廢の醜体」に注目している。同記事は「卒業生百二十三名の約半数は予科練、特幹復員者」で、「軍隊式な眼に余る制裁が繰り返され」、「卒業生が棍棒で「別れのビンタ」を行つたことが学友刺殺事件を生むに至つた」と述べ、「軍国調の払拭を等閑に附したる学校当局」の問題も取り上げた(1-2)。30日付の社説はこのような暴力を「学園テロ」と称し、横手中以外にもそれがみられることを指摘した(1-5)。投書欄では「一父兄」が、「当局のなさけある計ひ」によって「編入された」「予科練よりの復員生徒」を、「未だ居る軍国主義

者」とみなし、彼らの「封建的なる旧軍国思想」を非難しているが、このような「代表的な」投稿以外にも「リンチ」関連のものがあつた(1-6)。

また『毎日新聞』は同日付で刺殺事件を報じた記事のなかでつぎのように述べる。「問題の横手中学校は昨夏敗戦以来復員した予科練生徒や軍学校に在籍してゐた生徒が相当上級にあり、敗戦によつて植付けられた荒んだ気持がなほ救はれず、昨秋同盟休校事件を生じ」た(1-7)。これによって元予科練が同盟休校に関与したことが示されたわけだが、『毎日新聞』は同盟休校が起きた1945年10月の時点ではそれをまったく扱っていない。すなわち1946年3月の刺殺事件によってはじめて元予科練と同盟休校の関係に焦点が当てられたのである。

『秋田魁新報』の4月1日付の記事は「学校刺殺まで引き起した横中リンチ事件」と述べており(1-11)、それ以降はリンチの対策に注目した記事が掲載されている。「軍国主義的悪風の残滓ともいふべき「制裁」「ビンタ」等の陋習」を払拭するために、内務部長が中等学校長へ「嚴重な通牒」を出したり(1-12)、鷹巣農林学校で「上級生の圧迫的態度に不満の下級生が夜間これに暴行を加へた事犯」が起きると、刑事課長がその取締に関する通牒を發したりした(1-13)。「軍閥跋扈時代の軍隊内のリンチを模倣するこの種学園の悪弊風一掃」のため、大館中学校は放校処分を辞さない方針を決め、それによって「学園民主化」を図つた(1-14)。同校では地区別に父兄会も開き、「リンチを絶対行はぬやう緊密な連絡を図ることにし」ていた(1-15)。北秋田郡大館町の『北鹿新聞』も「上級生」から「下級生」に対する「旧軍閥者流の拳手の礼」を取り上げ、「軍国色の払拭」を求めている(1-16)。

このように記事内容の変化をたどると、刺殺事件からリンチへ焦点が移行し、横手中以外の中高等学校もクローズアップされていったことがわかる。そのなかで元予科練は「軍国主義者」、リンチは「軍国主義的」なものとしてみなされ、それを除去するための措置が講じられていった

とされる。そしてここまで占領軍はあまり動きをみせていなかったが、秋田県に設置された第84軍政中隊が「同盟休校や混乱についての報告」などを受けて、1946年5月13日に横手中を調査した。6月10日付の報告書によると、「学生の混乱を引き起こした遠因は、下級生に対して軍事的支配を行う復員生徒の態度」にあり、「下級生は、そのような扱いに疲弊し恐れるようになり、そして抵抗すると、上級生が刺殺され、下級生は怪我を負った」とされる⁽⁴⁷⁾。これまでの報道と同様に占領軍も復員生徒による「軍国主義的」なリンチを事件の原因として把握していたのである。

このように「軍国主義者」たる復員生徒が「軍国主義的」なリンチを加えたとされるが、さいごに注目したいのは「これまで長年の間、中等学生の慣習として黙認の傾向にあつたばん行」として、リンチを性格づける記事もあったことである(1-15)。それを記述した意図は不明だが、ここには上学生年支配の歴史的性格が見え隠れしている。佐藤秀夫によれば、「先輩による後輩の支配は、戦前・戦時中の中等学校に広く行きわたっていた現象であり、そのなかで「下学生年への私的制裁(リンチ)」が行われたとされる。重要なのは、それが「軍隊モデルの導入」を一要件として形成されたことである。そして勤労働員によって上学生年支配から「解放された感があった」が、敗戦後に「その支配が復活した」⁽⁴⁸⁾。本稿ではそうした「復活」のプロセスをみてきたわけだが、敗戦後に元予科練が復学するなかで上学生年支配が再び機能し、彼らが「軍国主義者」としてまなざされるようになるなかで、学校文化の擬似軍隊的な性格が表出していたとみることもできよう。

おわりに

さいごに、あらためて同盟休校と刺殺事件を「戦前」から「戦後」までの教育史的文脈に位置づけながら、「予科練くずれ」が立ち現れる過程をまとめる。そして若干の考察を加えつつ、「予科練くずれ」をめぐる「戦前」と「戦後」の関係性について試論を述べる。

同盟休校もリンチも、「軍隊モデル」にならって形成された上学生年支配を正当化した、中等学校の制度や文化に根ざすものだったが、それらは戦時体制のなかでフェードアウトしていった。そして敗戦直後の中等学校において、元予科練の復学や転入学、農産物配給の問題といった混乱状況が深刻化し、「非軍事化」と「民主化」のモメントが強化されるなかで、再び同盟休校が全国的に発生した。そして同盟休校が目立たなくなった時期に刺殺事件が発生し、各紙がそれを取り上げた。当時の出版状況をみると敗戦後は地方紙の復刊によって、それまでの1県1紙体制が変化していく時期であり、そうしたなかで刺殺事件をめぐる複数の語りがかがえた。具体的には刺殺事件とリンチは必ずしも直接的な因果関係が結ばれるものではなく、リンチの主体も元予科練に限定されるものではなかった。しかし刺殺事件をめぐるセンセーショナルな報道のなかで、「軍国主義者」とみなされた元予科練らによる「軍国主義的」なリンチに焦点が当てられ、その対策も講じられるなかで「予科練くずれ」が立ち現れていった。

このような「予科練くずれ」をめぐる動向は、「戦後派(アプレゲール)」の潮流に棹差すといえよう。周知のように戦後派とは第一次大戦後のフランスで起きた文化運動の総称で、第二次大戦後の日本の文学者たちがそれを自称したことから使われはじめるが、そこから転じて「伝統や旧習への反抗的態度を示す戦後若者世代を蔑称することば」となった⁽⁴⁹⁾。当時の雑誌では、「軍国主義よりの解放。はきちがえられた自由は放縦主義へと！」といわれ、「ストライキ」も例としてあげられている⁽⁵⁰⁾。鶴見俊輔は、「少年航空兵」の事例などをあげながら、戦後派から実存主義の思想を読み取っており⁽⁵¹⁾、元予科練のなかにも戦後派という世代的な特徴を読みとることができよう。

したがって同盟休校と刺殺事件のなかで現れた「予科練くずれ」は「戦前」と「戦後」の結節点に位置づくものであったといえる。そうした意味で、刺殺事件の原因を「復員生徒の態度」とのみ捉える占領軍の見解は、皮相的といわざ

るをえない。志賀直哉は元予科練の「再教育」、つまり「その心境を青年らしい健全なものに還す特別な教育」によって、「彼等の頭を完全に切りかへる工夫をすべきだ」と主張した⁽⁵²⁾。だがこの記事を見た元少年兵の渡辺清は、「再教育だけで特攻隊員の頭を「完全に切りかえる」ことができるだろうか」と当時の日記に綴っている⁽⁵³⁾。坂口安吾も志賀に対して、「易々と註文通りの人間が造れる」はずがないと主張し、「暴れられては困るから、彼らを集めて再教育せよといふ議論」は、「ピントの狂つた心配」であると批判した⁽⁵⁴⁾。

本稿で論じてきた内容も踏まえると、「予科練くずれ」をめぐる問題を元予科練の「再教育」によって解決しようとするのはまさに「ピント」はずれであり、彼らをして「予科練くずれ」たらしめた上学年生支配など、中等学校の制度や文化それ自体を問題化しなければならなかったといえよう。だが、いわゆる「人間宣言」をしたばかりの天皇が、「特攻くずれなど」を「善導することはできぬのか」と「御下問」したことが象徴するように⁽⁵⁵⁾、実際には「予科練くずれ」のみに焦点が当てられ、それによって「戦前」と「戦後」のねじれが解消されないままになったのではないだろうか。

以上のような議論を展開してきたが、「予科練くずれ」はその後どのような展開をみせたのか。一例をあげると、元予科練の永末千里が、1955(昭和30)年に航空自衛隊へ入隊したときのことを、つぎのように振り返っている。「集まってきた連中を見てびっくりした。予科練の残党が顔を揃えていたからである」、「戦後すでに十年を経過したが、結局〈特攻くずれ〉は一般社会には馴染めなかったのであろうか」⁽⁵⁶⁾。こうした点については、再軍備をめぐる動向を踏まえながら具体的に検討・考察する必要がある、もはや今後の課題としなければならない。

注

(1) 拙稿「戦後初期における旧軍関係教育機関出身者への施策―「非軍事化」と「民主化」の動向とその射程に着目して―」(教育史学会編『日本

の教育史学』第60集, 2017年), 拙稿「旧軍関係教育機関出身者をめぐる中等・高等教育機関の対応―戦後初期における転入学措置の展開過程に注目して―」(『筑波大学教育学系論集』第42巻第1号, 2017年)。

(2) 「予科練くずれ」や「特攻くずれ」の初出は不詳だが、志賀直哉が「今でもすでに「特攻隊くずれ」などいふ言葉が出来てゐる」と述べたことから(「声／特攻隊再教育」『朝日新聞』東京本社, 1945年12月16日, 第2面), そうした呼称は敗戦直後から用いられていたといえる。問題行動に及んだとされたものの肩書きを「元予科練生」などと呼ぶ記事もいくつかあり、本稿ではそれらも「予科練くずれ」に含まれると考える。

(3) 秋田県立横手高等学校編刊『美入野回想九十五周年』1994年, 45, 49頁。

(4) 福間良明『殉国と反逆―「特攻」の語りの戦後史―』(青弓社, 2007年), 吉田裕『兵士たちの戦後史』(岩波書店, 2011年)。戦前の予科練に関する研究として、高野邦夫が一次資料の収集と先行研究の整理を行い、予科練に関する研究の素地を築いている。「予科練くずれ」についても若干言及しているけれども、敗戦後の元予科練の動向について十分に検討したわけではない(高野『軍隊教育と国民教育―帝国陸海軍軍学校の研究―』つな出版, 2010年, 第1部第3章・第3部第4章。高野編『近代日本軍隊教育史料集成』第12巻(海軍飛行予科練習生教育), 柏書房, 2004年)。

(5) 寺崎昌男「明治学校史の一断面―学校紛擾をめぐって―」(教育史学会編『日本の教育史学』第14集, 1971年), 佐藤秀夫「学校紛擾の史的考察」(佐藤『教育の文化史2 学校の文化』阿吡社, 2005年, 初出1984年), 小野雅章「1920~30年代にかけての学校事件・学校事故史研究素描―学校紛擾の展開を中心に―」(日本大学教育制度研究所編『教育制度研究紀要』第39集, 2008年)。

(6) 前掲「学校紛擾の史的考察」250頁。

(7) 山中明『戦後学生運動史』青木新書, 1961年, 第1章。

(8) 荻野富士夫『戦前文部省の治安機能―「思想

- 統制」から「教学錬成」へ―』校倉書房，2007年，415頁。
- (9) 逸見勝亮「少年兵史素描」，教育史学会編『日本の教育史学』第33集，1990年，129頁。
- (10) 「志願に秋田は一位／残念にも学科は悪い」『秋田魁新報』1944年11月24日，第2面。
- (11) 秋田県立横手高等学校百周年記念史編纂委員会編刊『横手高等学校百年史』1998年，195～196頁。
- (12) 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第26巻，大日本雄弁会講談社，1958年，182～185頁。
- (13) 前掲『横手高等学校百年史』222頁，資料編の47頁。北海道庁立函館中学校も「復員組」を編成している（函館中部高等学校創立七十周年記念事業協賛会編刊『七十年史』1965年，100，104頁）。
- (14) 横手中学校第43期生「太平洋戦争下の中学生の記録」編集委員会編刊『零の青春―太平洋戦争下の中学生の記録―』1992年，208，213頁。
- (15) 秋田魁新報社史編修委員会編『秋田魁新報百二十年史』秋田魁新報社，1995年，209～210，223～224頁。
- (16) 「横中ぶり返す／校長の態度注目さる」『秋田魁新報』1945年10月30日，第2面。
- (17) 「横中円満解決」『秋田魁新報』1945年11月2日，第2面。
- (18) 「第八十九回帝国議会予想質疑事項並答弁資料」大田周夫旧蔵資料」SS180-5-16（国立教育政策研究所蔵）。1945年11月5日以後のものとして，16日に発生した弘前高等学校の学校紛擾があげられており，23日に解除された法政大学の同盟休校は「未解決」とされている。したがって16日から23日までにこの資料が作成されたと推定される。
- (19) 前掲『戦前文部省の治安機能』414頁。
- (20) 高橋司編『秋田県教育史』戦後編第1巻，秋田県教育研究所，1962年，7～9頁。
- (21) 「校長の不誠意／能工も遂に同盟休校」『秋田魁新報』1945年10月28日，第2面。
- (22) 能代工業高等学校校史編纂委員会『伝統は生きている―盤若の丘に六十年―』秋田県立能代工業高等学校創立六十周年記念出版委員会，1971年，38頁。
- (23) 佐渡高等学校百年史編集委員会編『佐渡高等学校百年史』佐渡高等学校同窓会，1999年，275～283頁。
- (24) 『上毛新聞』以外の地方紙は1945年後半に発行されていない。関連記事として「前中で予科練復帰生が要求提出」（『毎日新聞』群馬版，1945年10月26日，第2面）のみ確認した。
- (25) 上毛新聞社史編さん委員会編『上毛新聞百年史』上毛新聞社，1987年，116～117，121～122，133～137頁。
- (26) 「前中に同盟休校／予科練出が首謀で」『上毛新聞』1945年10月25日，第1面。『上毛新聞』の記事は，前橋高等学校校史編纂委員会編『前橋高校百三年史』（下巻，前橋高等学校，1983年，1184～1187頁）参照。
- (27) 前橋市教育史編さん委員会編『前橋市教育史』下巻，前橋市，1988年，208～209頁。
- (28) 戦後における群馬県教育史研究編さん委員会編『群馬県教育史戦後編』上巻，群馬県教育委員会，1979年，111頁。
- (29) 「柏木校長に決議文／前中精神の昂揚叫ぶ」『上毛新聞』1945年10月26日，第2面。
- (30) 「盟休解決に／柏木校長の決意」『上毛新聞』1945年10月28日，第2面。
- (31) 前掲『前橋高校百三年史』下巻，1174頁。
- (32) 「前中の盟休事件／補習科生が解決に奔走」『上毛新聞』1945年10月27日，第2面。
- (33) 「座談会 前高の十年」，前橋高等学校坂東太郎編集委員会編『坂東太郎』復刊第1号，1959年，74頁。
- (34) 前掲『前橋高校百三年史』下巻，1180～1181頁。
- (35) 文部省編『復刻版 文部行政資料（終戦教育事務処理提要）』第1集，国書刊行会，1997年，86頁（原著1945年）。
- (36) 前掲「第八十九回帝国議会予想質疑事項並答弁資料」。
- (37) 前掲『近代日本教育制度史料』第31巻，331～332頁。
- (38) 「学園盟休への責任感／大した事なしと／流

- 行物程度の見解表明／川崎事務官』『秋田魁新報』1945年11月2日，第2面。
- (39) 「秋田県議会会議録 三九〇 通常・会議録一（昭和二〇年）」45～53頁（秋田県公文書館蔵）。
- (40) 「同盟休校」を「学校としては不名誉な」ものとして捉える，秋田県立横手高等学校校史編纂委員会編刊『横手高校校史資料編』（第1～3集，1992～93年）のなかにも，戦前の同盟休校に関する記事は多数みられる。
- (41) 前掲『零の青春』208～209頁。
- (42) 角館歴史村青柳家編刊『凶誌 新聞創刊の歴史 付・秋田県における新聞の興亡』1990年，55～56頁。
- (43) 日本新聞協会編刊『地方別日本新聞史』1956年，49頁（秋田魁新報調査部長の鎌田喜市郎執筆）。
- (44) 井川充雄『戦後新興紙とGHQ—新聞用紙をめぐる攻防—』世界思想社，2008年，第3章。
- (45) 能代市の『北羽新報』，由利郡本荘町の『本荘時報』と『鳥海通信』を検討した。
- (46) 加藤富夫「負け犬たち」，秋田県立横手高等学校校誌編集部編『美入野』第74号，1973年，70頁（秋田県立横手高等学校蔵）。資料の複写に際しては，秋田県立横手高等学校総務副主任の山信田修氏のご協力を得た。記して謝意を表したい。
- (47) “UNIT HISTORY”, Headquarters 84th Military Government Headquarters and Headquarters Company, 10 June 1946, RG407, NARA. (大矢一人編集・解説『軍政（ナンバーMG）レポート』第2巻（北海道・東北2），現代史料出版，2007年，65～66頁）。
- (48) 佐藤秀夫「[先輩] 支配の歴史と構造」，前掲『教育の文化史2』（初出1990年）。戦前の横手中でも上級生から下級生への暴力行為がみられた。たとえば，1917年に野球の試合に負けた4年生が「嫉妬心」から3年生へ「横暴」な行為をして病院送りにした（「横中生の横暴」『秋田魁新報』1917年9月29日，第3面）。
- (49) 思想の科学研究会編『日本占領研究事典』現代史出版会，1978年，8～9頁（後藤宏行執筆）。
- (50) 「アプレゲール（戦後派）女学生の生態」『ちやっぷりん』第1巻第3号，東和文化社，1949年（永井良和・松田さおり編『占領期生活世相誌資料Ⅱ 風俗と流行』新曜社，2015年，151頁）。
- (51) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦—』岩波新書，1956年，第5章（鶴見執筆）。
- (52) 前掲「声／特攻隊再教育」。
- (53) 渡辺清『砕かれた神—ある復員兵の手記—』岩波現代文庫，2004年，149頁（初出1977年）。
- (54) 坂口安吾「罌堂小論」，『坂口安吾全集』第4巻，筑摩書房，1998年，4～5頁。同書の解題（522頁）によると「罌堂小論」は「発表誌未詳」だが，『墮落論』（銀座出版社，1947年）に収録された「罌堂小論」の本文の扉には「昭和二〇年」と記されているとされる。
- (55) 「転落の復員軍人を／聖上・深く御憂慮／復員省・異例の上奏文」『朝日新聞』東京本社，1946年1月13日，第2面。
- (56) 永末千里『航空自衛隊員誕生す—躍動感あふれる創設時代の物語—』潮書房光人社，2012年，25頁。

A Study of the History of Education for “Fallen Naval Aviator
Preparatory Course Trainees (*Yokaren-kuzure*)”:
Focusing on the Student Strike and Stabbing Incident at Akita
Prefectural Yokote Middle School (1945–46)

Shinya SHIRAIWA

Many youths enlisted before the system of Naval Aviator Preparatory Course Trainees (hereinafter referred to Trainees) was abolished, but the majority of the enlistees were not sent to battlefield frontlines during World War II. It was reported that former Trainees were seen as troublemakers in and out of secondary schools when they returned from the war or were transferred, and they were commonly called “Fallen Trainees (*Yokaren-kuzure*)” during the postwar period. After the graduation ceremony at Akita Prefectural Yokote Middle School on March 27 1946, an incident was reported that a graduate of the school was stabbed to death by an enrolled student. At that time, newspapers focused their attention on the brutal actions (lynching) inflicted by former Trainees and regarded them as the cause for the incident. A newspaper article reported that former Trainees participated in a student strike at Yokote School on October 27 1945. This paper focuses on the student strikes and the stabbing incident at Yokote School, and clarifies the history and background, and considers the educational historical meaning of “*Yokaren-kuzure*”.

Student strikes were rooted in the culture of secondary schools, and brutal actions (lynching) were also based on Senior student domination formed on the military model, but faded away under the wartime regime. When demilitarization and democratization were carried out, intense student strikes occurred from October to November 1945. The strikes were not highly uniform in nature though former Trainees participated based on a similar dissatisfaction with the attitudes of schools. In 1946, student strikes were not widely reported in newspapers and the stabbing incident was sensationalized. The incident was reported by various methods as prescribed to postwar journalism. However, the former Trainees were regarded as “militarists”, lynching as “militaristic”, and “*Yokaren-kuzure*” appeared.

“*Yokaren-kuzure*” which appeared in student strikes and the stabbing incident was located at the nodal point of “prewar” and “postwar”. However, problems involving culture and the system of secondary schools as background factors were overlooked.